

### スポーツ活動の有無が長野冬季オリンピック大会の感想に及ぼす影響について：長野市内の小学校児童を対象として

平井, 敏幸 / WATABE, Chikashi / SANADA, Hisashi / HIRAI, Toshiyuki / 渡部, 近志 / 真田, 久

---

(出版者 / Publisher)

法政大学体育研究センター

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

The research of physical education and sports, Hosei University / 法政大学体育研究センター紀要

(巻 / Volume)

19

(開始ページ / Start Page)

23

(終了ページ / End Page)

32

(発行年 / Year)

2001-03-31

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00005068>

# スポーツ活動の有無が長野冬季オリンピック大会 の感想に及ぼす影響について

——長野市内の小学校児童を対象として——

**An effect on the Nagano Winter Olympic's impressions  
in sporting activities or no sporting activities for schoolchildren.**

平井 敏 幸 (日本体育大学)

Toshiyuki Hirai

真田 久 (筑波大学)

Hisashi Sanada

渡部 近 志 (法政大学)

Chikashi Watabe

(キーワード) 長野冬季オリンピック大会、オリンピズム、小学校児童、スポーツ活動

key word: the Nagano Winter Olympics, Olympism, schoolchildren, sporting activities.

## 1. 緒 言

1998年に長野県で開催された第18回長野冬季オリンピック大会は児童たちを参加させる一つの典型的な運動として「一校一国交流活動」が行われていた。この活動はオリンピック開催のほぼ2年前の1996年の1月に「自校の国際化教育推進のためにオリンピック大会・パラリピック大会を軸にして一校が一国と交流活動を主体的に行う<sup>1)</sup>」ことを目的に始められ、長野市内にある小・中学校および特殊学校の内、小学校50校（児童生徒数23,362名、教職員数1,216名）・中学校21校（児童生徒数12,816名、教職員数852名）・特殊学校4校（児童生徒数329名、教職員数194名）の計75校<sup>1)</sup>が参加して行われていた<sup>2)3)4)</sup>。また、長野市の近隣の小学校でも類似した活動を教師の指導のもとで児童が展開していた。これらの活動が児童に与えた影響を知ることは、今後、オリンピックのことを学校において教育する際の有益な示唆を得られるものと考えられる。

そこで、筆者らは長野冬季オリンピック大会終了後、長野県と他の県（北海道、神奈川県、兵庫県）における小学校において長野冬季オリンピック大会に際してオリンピックに関して児童が何を思い、何を感じたかを質問するアンケートを実施した。

各地域の小学校で行ったオリンピックに関する学習活動、オリンピックの感想や異文化理解の達成感、長野オリンピックに対する評価・批判、「オリンピックは何のためにあるのか」を児童がどのように感じたのかなどについての回答を比較検討した結果、「一校一国交流活動」に参加

していた長野市内の児童は他地域と比べると人的な交流を中心に積極的に多種多様な学習活動を行っていたこと、「世界の人々との友好関係」「平和への貢献」「自己意欲の高揚」などを思った児童の割合が多かったこと、また、オリンピック選手および大会への関心を持っている児童の割合が多かったこと、さらに、異文化理解の達成感を得た児童の割合が多いこと、およびオリンピックの意義を「世界中のみんながなかよくなるためにあり、試合に勝つことが目的ではない」と感じていた児童が多い特徴を発見したので、長野冬季オリンピック大会に際して組織的に行われた「一校一国交流活動」に少なからざる効果があったことを報告してきた<sup>5)6)7)</sup>。また、このような考察を通して長野市内の小学校において児童が行ってきた「一校一国交流活動」がオリンピックに関する教育に効果的であったこと、さらに、そこから「一校一国交流活動」がオリンピックの根本原則でもあるオリンピズムを理解させることにも効果的であった<sup>8)9)</sup>。以上の報告からオリンピックに関する教育を構築する基礎的資料を得てきた。

ところで、オリンピック競技会は、多種目のスポーツ競技が実施されている。それは、近代オリンピックを復興させたピエール・ド・クーベルタン(Pierre de Coubertin)がその目的を「スポーツによる青少年への教育実現を目指したもの」としたからである。そして、クーベルタンは青少年にスポーツ活動を実施させることによって教育的効果を期待していたと思える。教育的効果とはオリンピズムに代表される「スポーツ競技を通じ、身体と精神を鍛錬し、宗教、言語、国境などのさまざまな壁を越え、人々がお互いに理解しあい、友好を深めて、世界の平和に貢献する<sup>10)11)12)13)</sup>」ことを理解するところにある。

今日、スポーツはマスメディアの発展から「するスポーツ」と「みるスポーツ」に大別される。そして、今まで筆者らの調査報告は児童が「オリンピックについて学習して、オリンピック選手または応援国の人たちと交流して、そして、オリンピック競技会をみて」感じたことなどから児童がオリンピズムを理解することができたか否かを取り上げてきた。しかし、スポーツ振興の立場、またはスポーツ実践がもたらす身体的・精神的な効用を思うとき、「みるスポーツ」の意義を踏まえて「するスポーツ」の奨励を進めて行きたいものである。ただし、「するスポーツ」は、健康の維持・増進、集団意識、克己体験、人と人とのコミュニケーションなどの正の面を持つ反面、競技スポーツの色合いが濃くなり勝つことに固執しすぎるとスポーツ障害・傷害、不快ストレス、人間関係の軋轢、バーンアウト症候などの負の面も現れてくる。つまり、スポーツ活動は正の面と負の面が存在すると同様に児童のスポーツ活動がオリンピズムを理解する上で役立っている点および弊害になっている点が予測される。無論、スポーツを実践する場合、スポーツの正の面を引き出し負の面を軽減させていくことが大切であり、また、そのような指導法が望まれる。

そこで、本研究は「一校一国交流活動」を実施していた長野市内の小学校児童を対象として、スポーツ活動を実施している児童は「一校一国交流活動」に参加しつつオリンピックをどのように感じていたのか、またスポーツ活動を実施している児童のオリンピズムの理解度を検討することによってスポーツ活動の正の面および負の面を検討することを目的とした。

## 2. 方 法

### (1) 対象校と対象者

アンケート調査の対象校は、長野市内において「一校一国交流活動」を行った小学校50校の中から有意抽出法によって4校の学校を選定した。それから長野オリンピック開催当時5年生であった児童生徒549名（調査時小学6年生）を対象として実施し501名（男子231名、女子269名、性別不明1名）の児童から回答を得た（回収率91.3%）。

そして、本研究の標本はスポーツ活動の有無に回答していた499名を対象とした。

### (2) 調査期間

調査期間は、長野オリンピック終了後の1998年6月から7月にかけて実施した。また、調査用紙は、直接対象校に行き質問内容および回答方法を担当教員に説明・依頼をして配布し、回収は郵送で行うという配布郵送調査法にて行った。

### (3) アンケート用紙の作成

調査用紙は、選択肢法の回答で1. 児童の属性 2. スポーツ活動の有無 3. 長野オリンピックの観戦頻度（会場観戦・テレビ観戦） 4. 学校・クラスで長野オリンピックについて実施した活動内容 5. オリンピズムの理解 6. 自己意欲の高揚 7. オリンピックの感想 8. オリンピックは何のためにあると感じたか 9. オリンピックの「よかった」点、「よくなかった」点などの質問項目を中心に作成した。

### (4) 解析の視点

そして、本研究では上記したアンケート用紙のうち「スポーツ活動の有無」「オリンピズムの理解」「自己意欲の高揚」「オリンピックの感想」「オリンピックの意義」に関する質問項目の回答について分析・考察を行った。

本研究においては、オリンピズムを「人々がお互いに理解しあい、友好を深めて、世界の平和に貢献する」というキーワードで捉え、「友好を深める」意識を抽出する質問項目として「オリンピックに出ている国の人と友だちになれたらいいと思いますか（以下、『友好を深めたい』と略す）」、「世界の平和に貢献する」意識を抽出する質問項目として「世界が平和になるように、何かしたいと思うようになりましたか（以下、『平和への貢献』と略す）」、また、「人々がお互いに理解しあう」意識を抽出する質問項目としては、「ほかの国や人たちについて知ることができましたか（以下、『異文化理解の達成』と略す）」から判断することにし、以上の3項目の質問を設定した。回答方法は、「はい」「いいえ」「わからない」の選択肢に対する単数回答にて行った。そして、これらの回答から例えば、児童が友好を深めたいと思ったことが「オリンピズム」が理解されたと判断することにした。

「自己意欲の高揚」の意識を抽出する質問項目として「オリンピックを見て勉強や運動やスポーツなどを頑張ろうと思いましたが（以下、『勉強やスポーツなどを頑張ろう』と略す）」を設定しその回答から自己意欲の高揚度を判断することにした。回答方法は、「はい」「いいえ」「わからない」の選択肢に対する単数回答にて行った。

「オリンピックの感想」を抽出する質問項目は「これからも世界中でオリンピックがあったほうがよいと思いませんか（以下、『これからもオリンピックがあったほうがよい』と略す）」、「長野オリンピックをみておもしろかったですか（以下、『オリンピックはおもしろかったです』と略す）」、「また、オリンピックについて調べたいと思いませんか（以下、『オリンピックについてまた調べたい』と略す）」を設定し、その回答からオリンピックの関心度を判断することにした。回答方法は、「はい」「いいえ」「わからない」の選択肢に対する単数回答にて行った。

長野オリンピックを通して児童が「オリンピックの意義」をどう感じたのかを抽出する質問項目として「オリンピックは何のためにあると感じましたか」を設定した。そして、その回答は「1. 金メダルをとるためにある（以下、『金メダル』と略す）」「2. 試合に勝つためにある（以下、『試合に勝つ』と略す）」「3. がんばって練習をした人のためにある（以下、『練習した人』と略す）」「4. オリンピックをやる国だけのためにある（以下、『開催国だけ』と略す）」「5. 選手だけのためにある（以下、『選手だけ』と略す）」「6. 世界中のみんなが、なかよくなるためにある（以下、『仲良くなる』と略す）」「7. 選手やコーチ・監督そしてそれを見る人みんなのためにある（以下、『みんなのため』と略す）」の項目と「8. わからない」「9. その他（自由筆記）」を併せて9項目の選択肢をあげ、複数回答の無制限法にて求めた。なお、本調査での解析では「わからない」の回答を除外した。

そして、スポーツ活動の有無がオリンピズムの理解にどのような影響を及ぼしたかを検討するため、スポーツ活動の有無の回答と「友好を深めたい」「平和への貢献」「異文化理解の達成」の各々の質問項目の「はい」「いいえ」の回答を説明要因とした横計が基数である2×2のクロス集計を求めた。結果の処理は $\chi^2$ 検定（独立性）によって行った。

次に、スポーツ活動の有無がオリンピックの意義に対する意識にどのように影響するのかを検討するために、児童が感じた「オリンピックは何のためにあるか」の回答として設定した選択肢の項目から選んだ項目を「はい」としてその件数を求め、さらに「はい」の件数を総人数から引いた件数を「いいえ」の回答とした。そして、スポーツ活動の有無の回答と「オリンピックは何のためにあるか」の質問に対する回答を説明要因とした横計が基数である2×2のクロス集計を各項目毎に求めた。結果の処理は $\chi^2$ 検定（独立性）によって行った。

### 3. 結果と考察

#### (1) スポーツ活動の有無とその活動内容

スポーツ活動に関しては「学校内で体育の授業以外に先生に教えてもらっている活動、いわ

ゆる部活動」と「学校以外で学校の先生以外にスポーツを教えてもらっている活動、いわゆるスポーツ・クラブ活動」の有無をたずねる項目を設定し、「ある」と「ない」の選択肢に単数回答にて求めた。そして、本研究ではどちらかの活動に参加している児童をスポーツ活動が「ある」として捉えた。また、学校内外のどちらにも参加している児童に対しては2件の活動を併せて1件として捉えた。その結果、表1に示すように、学校の体育以外に部活動またはスポーツ・クラブでスポーツ活動を実施している児童は247名（49.5%）で、実施していない児童は252名（50.5%）であった。つまり、今回の調査の対象者となった児童の約半数が何らかのスポーツ活動に参加していた。そこで、児童がどのようなスポーツ種目に参加しているのかを自由記述による複数回答にて質問をした。そしてその回答から児童が実施しているスポーツ活動の競技種目と件数およびその割合をみたのが表2である。表2をみると36種目のスポーツ競技が抽出され、その中で最も多くの児童が行っているスポーツ活動は野球（24.3%）であった。次いで水泳（20.2%）、ミニバスケットボール（15.0%）、サッカー（8.9%）、スキー・ドッチボール（8.5%）の順であった。以上のようにスポーツ活動を行っている児童の中で約1/4の児童が野球を行っていた。長野県ということで冬季のスポーツ活動が盛んに行われていると

表1. 学校内外でのスポーツ活動の有無

|     | スポーツ活動の有無<br>n = 499 (%) |
|-----|--------------------------|
| あ る | 247 (49.5)               |
| な い | 252 (50.5)               |

予測したが、冬季スポーツの中で最も多く教わっていると回答したスポーツ種目はスキーの8.5%であり以外と少数であった。このことは、対象小学校が長野市内にあるので近くにスキー場がないための環境による要因があるものと推察される。

表2. 学校内外のスポーツ活動の種類とその件数および割合

|            | スポーツ活動の件数<br>n = 247 |      |              | スポーツ活動の件数<br>n = 247 |     |
|------------|----------------------|------|--------------|----------------------|-----|
|            | 件 数                  | %    |              | 件 数                  | %   |
| 1 野球       | 60                   | 24.3 | 19 ジャズダンス    | 3                    | 1.2 |
| 2 水泳       | 50                   | 20.2 | 20 バドミントン    | 3                    | 1.2 |
| 3 ミニバスケット  | 37                   | 15.0 | 21 ダンス       | 2                    | 0.8 |
| 4 サッカー     | 22                   | 8.9  | 22 エアロビクス    | 2                    | 0.8 |
| 5 スキー      | 21                   | 8.5  | 23 フィギュアスケート | 2                    | 0.8 |
| 6 ドッチボール   | 21                   | 8.5  | 24 マット       | 2                    | 0.8 |
| 7 バスケットボール | 12                   | 4.9  | 25 インラインホッケー | 1                    | 0.4 |
| 8 体操       | 10                   | 4.0  | 26 陸上（ランナーズ） | 1                    | 0.4 |
| 9 空手       | 8                    | 3.2  | 27 ローラースケート  | 1                    | 0.4 |
| 10 剣道      | 6                    | 2.4  | 28 柔道        | 1                    | 0.4 |
| 11 バレエ     | 6                    | 2.4  | 29 フットサル     | 1                    | 0.4 |
| 12 テニス     | 6                    | 2.4  | 30 シュノーケリング  | 1                    | 0.4 |
| 13 バレーボール  | 6                    | 2.4  | 31 ホップダンス    | 1                    | 0.4 |
| 14 アイスホッケー | 5                    | 2.0  | 32 ローラーホッケー  | 1                    | 0.4 |
| 15 ソフトボール  | 5                    | 2.0  | 33 縄跳び       | 1                    | 0.4 |
| 16 卓球      | 4                    | 1.6  | 34 合気道       | 1                    | 0.4 |
| 17 スケート    | 4                    | 1.6  | 35 新体操       | 1                    | 0.4 |
| 18 飛び箱     | 4                    | 1.6  | 36 リレー       | 1                    | 0.4 |

(2) オリンピズムの理解

スポーツ活動の有無がオリンピズムの理解にどのような影響を及ぼしたかの関連を検討するため、スポーツ活動の有無の回答と「友好を深めたい」「平和への貢献」「異文化理解の達成」の各々の質問項目の「はい」「いいえ」の回答を説明要因とした横計が基数である2×2のクロス集計を求めた。それが表3である。結果の処理は $\chi^2$ 検定（独立性）によって行った。その結果「平和への貢献」と「異文化理解の達成」についての項目に有意な人数の偏りは認められず、スポーツ活動の有無によってこれらの意識に影響を及ぼすことは少ないことが推察された。ところが、「友好を深めたい」といった意識に関しては5%水準で人数の偏りが有意であることが認められた。すなわち、相対的にみると「友好を深めたい」と思った児童はスポーツ活動の有無に関わらず多く、また同程度の割合を示しているものの、「友好を深めたい」を否定的に捉えている児童をみるとスポーツ活動が「ある」児童のほうが「ない」児童より73.1%と比較的多い割合を示している。長野市内の児童は「一校一国交流活動」に参加しており、オリンピックについて多種多様な学習活動を体験している<sup>8)</sup>にも関わらず「友好を深めたい」を否定的に捉えている児童はスポーツ活動が「ある」児童に比較的多い割合がみられているといえる。つまり、「一校一国交流活動」で体験した内容よりもスポーツ活動によって得られたスポーツに対する取り組み方、考え方がこのような結果を導き出したと推定されよう。

ところで、武藤は<sup>14)</sup>「我が国では東京オリンピック（1964年）以降、スポーツトレーニングの早期専門化、低年齢化傾向がしだいに強まってきたといわれている。つまり、一流選手を目指すために小学生低学年あるいは幼稚園の頃から専門的トレーニングを開始している傾向がみられる」と報告している。つまり、一流選手を目指し低年齢のころから専門的なトレーニングを開始させるということは指導者や親が勝利至上主義に偏りすぎた考えで児童らにスポーツ活動を指導してしまう可能性が予想される。指導者や親が勝利至上主義に偏りすぎた指導を行った場合の児童への心理的弊害について平井は<sup>15)</sup>「指導者が勝つことに比重をおくと技術的に優れた子どもたちが優秀とされ、うまければ何をやってもよいという自己中心的な子どもをつくりあげてしまう」と述べている。今回の調査でスポーツ活動が「ある」児童で「友好を深めたい」を否定的に捉えた児童がどのようなスポーツ技能を持ち、またどのようなスポーツ指

表3. スポーツ活動の有無とオリンピズムの理解との関連

| 質問項目        | 感想     | スポーツ活動     |            | $\chi^2$ 値 |
|-------------|--------|------------|------------|------------|
|             |        | ある (%)     | ない (%)     |            |
| 1) 友好を深めたい  | 1) はい  | 209 (51.0) | 201 (49.0) | 3.942*     |
|             | 2) いいえ | 19 (73.1)  | 7 (26.9)   |            |
| 2) 平和への貢献   | 1) はい  | 163 (51.7) | 152 (48.3) | 0.000      |
|             | 2) いいえ | 17 (51.5)  | 16 (48.5)  |            |
| 3) 異文化理解の達成 | 1) はい  | 183 (52.9) | 163 (47.1) | 0.143      |
|             | 2) いいえ | 27 (49.1)  | 28 (50.9)  |            |

\* : P < .05

導を受けているのかを解明することはできない。しかし、スポーツ活動に参加することによって自己中心的な考えをもち、友好を否定することは心の成長に負の作用をもたらすものと考えられる。したがって、指導者や親などはスポーツ活動に関して勝利至上主義に偏りすぎた指導が児童の心理的発達に弊害をもたらす可能性があることを深く理解して、スポーツ活動における心理的効用を期待できるスポーツ活動の環境づくりを心がけていく必要があると考えられる。そして、たとえ、競技スポーツとしてのスポーツ活動であっても指導者や親が児童にスポーツ活動を通して「友好を深めたい」と感じることでできるこころを育て上げる指導が望まれる。

### (3) 自己意欲の高揚とオリンピックの感想

スポーツ活動の有無が「自己意欲の高揚」と「オリンピックの感想」に及ぼす影響を検討するために、スポーツ活動の有無と「自己意欲の高揚」および「オリンピックの感想」の各々の質問項目の「はい」「いいえ」の回答を説明要因とした横計が基数である2×2のクロス集計を求めた。それが表4である。結果の処理は $\chi^2$ 検定（独立性）によって行った。その結果、「自己意欲の高揚」と「オリンピックについてまた調べたい」の項目に5%水準で人数の偏りが有意な差が認められた。つまり、オリンピックを見て「勉強やスポーツなどを頑張ろう」と感じない児童は、スポーツ活動を行っていない児童に多く、逆に、オリンピックを見て「勉強やスポーツなどを頑張ろう」と感じる児童はスポーツ活動を行っている児童に多い傾向がみられた。このことはスポーツ活動を行っている児童のほうが活動をしていない児童よりオリンピック競技会またオリンピック選手から間接的に影響を受けていたといえよう。すなわち、スポーツ活動を行っている児童はオリンピックを通して積極的に自分自身の可能性をより高めようと感じることができたと推察される。ただし、本調査から自己意欲を高めたのは学習意欲か、スポーツに関する意欲か、日常生活における意欲かは解明できない。とはいえ、スポーツ活動

表4. スポーツ活動の有無と自己意欲の高揚およびオリンピックをみた感想との関連

| 質問項目                    | 感想     | スポーツ活動     |            | $\chi^2$ 値 |
|-------------------------|--------|------------|------------|------------|
|                         |        | ある (%)     | ない (%)     |            |
| 1) 勉強やスポーツなどを頑張ろう       | 1) はい  | 170 (55.0) | 139 (45.0) | 5.945*     |
|                         | 2) いいえ | 23 (37.1)  | 39 (62.9)  |            |
| 2) 世界中の人がみんな友達になれたらいい   | 1) はい  | 190 (50.8) | 184 (49.2) | 0.004      |
|                         | 2) いいえ | 12 (48.0)  | 13 (52.0)  |            |
| 3) オリンピックについてまた調べたい     | 1) はい  | 139 (54.3) | 117 (45.7) | 4.501*     |
|                         | 2) いいえ | 31 (39.7)  | 47 (60.3)  |            |
| 4) これからもオリンピックがあったほうがよい | 1) はい  | 223 (48.7) | 235 (51.3) | 0.000      |
|                         | 2) いいえ | 6 (50.0)   | 6 (50.0)   |            |
| 5) オリンピックはおもしろかった       | 1) はい  | 220 (49.0) | 229 (51.0) | 0.000      |
|                         | 2) いいえ | 6 (50.0)   | 6 (50.0)   |            |

\*:  $P < .05$

を行っている児童がオリンピックを見て自己意欲の高揚に役立ったとすればスポーツ活動の正の面の現れだと思われる。また、スポーツ活動を行っていない児童は「オリンピックについてまた調べたい」と感じなく、逆に、スポーツ活動を行っている児童は「オリンピックについてまた調べたい」と感じている傾向がみられた。つまり、スポーツ活動を実施している児童のほうが実施していない児童よりオリンピックについての関心度が高い傾向があると推察される。そして、「これからもオリンピックがあったほうがよい」と「オリンピックはおもしろかった」についての項目に有意な人数の偏りは認められず、スポーツ活動の有無によってこれらの意識に影響を及ぼすことは少ないことが推察された。

#### (4) オリンピックの意義

スポーツ活動の有無がオリンピックの意義に対する意識にどのように影響するのかを検討するために、スポーツ活動の有無の回答と「オリンピックは何のためにあるか」の質問に対する回答を説明要因とした横計が基数である2×2のクロス集計を各項目毎に求めた。それが表5である。結果の処理は $\chi^2$ 検定(独立性)によって行った。その結果、全ての項目に有意な人数の偏りは認められず、スポーツ活動の有無によってオリンピックの意義に対する意識に影響を及ぼすことは少ないことが推察された。つまり、オリンピックの意義をどう感じるのかは、スポーツ活動の有無よりも「一校一国交流活動」で行われた多種多様のオリンピックに関する学習活動および児童が体験したことのほうが影響を及ぼすことが示唆される。

表5 スポーツ活動の有無と「オリンピックは何のためにあるか」の感想との関連

|           |     | ス ポ ー ツ 活 動 |            | $\chi^2$ 値 |
|-----------|-----|-------------|------------|------------|
|           |     | あ る (%)     | な い (%)    |            |
| 1. 金メダル   | は い | 27 (45.8)   | 32 (54.2)  | 0.223      |
|           | いいえ | 220 (50.0)  | 220 (50.0) |            |
| 2. 試合に勝つ  | は い | 26 (52.0)   | 24 (48.0)  | 0.050      |
|           | いいえ | 221 (49.2)  | 228 (50.8) |            |
| 3. 練習した人  | は い | 115 (50.2)  | 114 (49.8) | 0.042      |
|           | いいえ | 132 (48.9)  | 138 (51.1) |            |
| 4. 開催国だけ  | は い | 1 (33.3)    | 2 (66.7)   | P = 1.000  |
|           | いいえ | 246 (49.6)  | 250 (50.4) |            |
| 5. 選手だけ   | は い | 4 (66.7)    | 2 (33.3)   | P = 0.446  |
|           | いいえ | 243 (49.3)  | 250 (50.7) |            |
| 6. 仲良くなる  | は い | 205 (48.7)  | 216 (51.3) | 0.508      |
|           | いいえ | 42 (53.8)   | 36 (46.2)  |            |
| 7. みんなのため | は い | 101 (49.5)  | 102 (50.2) | 0.000      |
|           | いいえ | 146 (49.3)  | 150 (50.7) |            |

※：「4. 開催国だけ」「5. 選手だけ」の観測度数に5以下があるため、Fisherの直接確率計算法を用いて処理した。

#### 4. む す び

本研究は「一校一国交流活動」を実施していた長野市内の小学校児童を対象として、スポーツ活動を実施している児童は「一校一国交流活動」に参加しつつオリンピックをどのように感じていたのか、またオリンピズムの理解の程度からスポーツ活動の正の面および負の面を検討することを目的とした。その結果、「友好を深めたい」を否定的に捉えている児童をみるとスポーツ活動が「ある」児童のほうが「ない」児童より比較的多い割合を示した。このことは、スポーツ活動に参加することによって自己中心的な考えをもち、友好を否定することに結びつく恐れを示唆させるものであり、指導者や親はスポーツ活動に関して勝利至上主義に偏りすぎた指導による児童への心理的弊害について深く理解して指導にあたる必要があると考えられた。一方、スポーツ活動を行っている児童はオリンピックを見て「勉強やスポーツなどを頑張ろう」と感じる傾向がみられた。このことはスポーツ活動を行っている児童は行っていない児童よりオリンピックを通して積極的に自分自身の可能性および意欲をより高めようと感じることができたと推察される。

さて、スポーツを通して教育的活動を行う場合、大きく分けると2つの教育的配慮がある。それは、「スポーツを教えること」と「スポーツで教えること」である。前者は様々なスポーツ種目を安全に効果的に行うためのやり方を教えることであり、後者は、スポーツ活動を通して、克己心、仲間意識といった個人の生き方に関わる事柄を教えることである。そして、スポーツに関わる教育者はこの2つの伝授に日々奮闘していることと思う。今回の調査においてもスポーツ活動の有無によって児童がオリンピックから感じた事柄について正の面または負の面がみられた。この両方の面はスポーツの持つ特性ともいえる。そして、スポーツがもつ特性の中で正の面を伸ばし負の面を軽減させ、さらに「スポーツで教えること」を充実させることがスポーツが教育活動として、そして、オリンピックが教育活動としてその教育的効果を期待できるものになっていくと考えられる。

#### 参考・引用文献

- 1) 長野市校長会 長野市教育センター国際化教育研究委員会編：「世界の人とともに生きる―一校一国交流活動の記録―」，信毎書籍出版センター，長野（1999）。
- 2) 相川俊英：「長野オリンピック騒動記」草思社，東京，pp. 157-175，（1998）。
- 3) 長野県教育委員会編：「夢かなうふゆ―長野オリンピック・長野パラリンピック読本―」，カシヨ株式会社，長野，（1996）。
- 4) 長野県教育委員会編：「ともだちいっぱい冬の冬―長野オリンピック・長野パラリンピック読本―」，カシヨ株式会社，長野，（1996）。
- 5) Hisashi Sanada (University of Tsukuba) Toshiyuki Hirai (Nippon Sport Science University) Junko Tahara (Chukyo Women's University)(1999) "Cross-cultural understanding through the Olympic Games. - An investigation of "One School One Country Program" in the Nagano Olympics -", Conference The Olympics in the Next Millenni-

um by Center for Olympic Studies, University of New South Wales.

- 6) 平井敏幸, 真田 久, 刈谷春郎: 小学校児童が感じた「オリンピックは何のためにあるのか」についてー長野オリンピック終了後の調査からー, 法政大学体育研究センター紀要, 第18号, pp. 65-76, (2000).
- 7) 真田 久・平井敏幸・深川長郎・服部利夫: 「一校一国運動」と子どもたち, JOA Times. 第22号, pp. 18-23, (1998).
- 8) 平井敏幸, 真田 久: 長野オリンピックにおける小学校児童の活動とオリンピズムの理解との関連について, 日本体育学会神奈川支部紀要 体育研究 第33号, pp. 7-12, (1999).
- 9) 平井敏幸, 真田 久: 長野冬季オリンピック大会での「一校一国交流活動」とオリンピズムについての理解との関連に関する研究ー長野市内の小学校児童についてー, 日本体育大学紀要 第31巻 (投稿中)
- 10) 田原淳子: 日本におけるオリンピック運動の歴史(2)ー体育史専門分科会シンポジウム報告ー体育史研究 10号, 日本体育学会体育史専門分科会編, pp. 63-92, (1993).
- 11) 田原淳子: オリンピズムの概念ースポーツ思想の諸概念と比較してー, 体育原理研究 第18号, 日本体育学会体育原理専門分科会編, pp. 16-19, (1987).
- 12) 清水重勇: オリンピズムはなぜ要求されたのかーその歴史と現在ー, 体育の科学(8) 第46巻, pp. 614-619, (1996).
- 13) 滝沢康二: 体育・スポーツの未来像ーオリンピズムをめぐるー, 体育原理研究 第25号, 日本体育学会体育原理専門分科会編, pp. 95-98, (1991).
- 14) 武藤芳照: 「子どものスポーツ」東京大学出版会, 東京, pp. 22-28, (1989).
- 15) (財)神奈川県体育協会編, 平井敏幸他: 「スポーツ医科学ハンドブック」医学書院, 東京, pp. 36-37, (2000).